

## 木内信胤先生のこと

佐藤社長が信徒の一人と崇める  
木内信胤(きうちのみつね)先生の紹介

- ① 産経新聞「葬送」
- ② 日本経済新聞「私の履歴書」

産経新聞 1993年12/16(土) 3.12.16

三菱グループの創始者、岩崎弥太郎の孫に当たり、おじに首相を二人ももった家柄。そして経済評論家としては、歴代首相の経済指南番といわれた人物とあって、その葬儀には経済界のトップを中心にVIPがずらり顔をそろえた。とても肩書に順番をつけようがないということか、司会は「弔辞はすべて友人ということでお願います」。

最初の二人は木内さんの専門、経済学とは一見無縁に見えた。中村元東大名誉教授は、東洋哲学の

### 葬送



世界的権威。木内さんは経済学とともに宗教にも関心が深く、中村さんに意見や協力を求めることも多かった。中村さんの自宅を訪ねたときは、書棚に「大蔵経」を見付けて目を輝かせていた、という。「難民を助ける会長」の相馬雪香さんは、平和運動、MRA(道徳再武装)での、木内さんの活躍を紹介し、あらためてその思想、活動領域の広さ、深さを思い起こさせた。

木内 信胤氏 (15日 東京都港区・青山葬儀所)  
世 界 経 済 調 査 会 理 事 長 木 内 信 胤 氏  
き うち の み つ ね

続く福田赳夫元首相は風邪のため代読だったが、終戦時の経済運営に木内さんが果たした役割を細かくたどったものだった。

それによると、記録的な米の不作為となった昭和二十年。一部では「一千万人餓死説」まで出るほどだった。米不足に目をつけた買占めを防ぐために、大蔵省は翌年二月に新円封鎖を断行した。福田元首相によると、当時終戦連絡部長としてGHQとの折衝に当たっていた木内さんが内外から信頼を受けていたからこそ実現した、奇跡的な仕事だったという。

同じような不作為となった今年。ドタバタ政治劇が目立つが、その陰で、若き日の木内さんのように、新たな農政、景気回復に向けて努力している人もどこかにいるに違いない。

九十歳をすぎたお現役だった木内さんもまた、日本の行く末に思いをめぐらせていたらしい。五日、九十四歳の生涯を閉じた木内さんの仕事を二男の孝さんが整理していると、これからの計画、予定がびっしり書き込まれたメモが見つかった。「物心ついて以来、勉強しているか、人に語っている姿しか思い浮かびません」と孝さんはいう。(田中規雄)

# 木内信胤氏

東大の大学院生時代、私が人生や人格形成などで大きな影響を受けた方に出会った。世界経済調査会の理事長だった木内信胤さんだ。一九五四年に、ある

## 私の履歴書

基も 政さ 城し 八や

米国人から「木内さんの所で仕事をしないか」との誘いを受け、麻布・狸穴のお宅に伺ったのがきっかけだった。

当時、調査会の事務所は目録本店近くの常盤橋の角にある古い木造の二階建てだった。旧満鉄調査部や東亜同文書院出身の人たちが、地味な経済調査をし

ていた。

木内さんは五年六月に理事長になられたが、母上が三菱財閥創始者の岩崎弥太郎の娘、奥様は福沢諭吉の孫という、近代日本の名門の出だった。旧横浜正金銀行で調査・外国為替畑を中心に歩かれ、英国、ドイツ、中国にも長く駐在された。終戦時には同行の総務部長兼調査部長の職にあった。

渋沢敏三氏の義兄という縁も

## 経済評論、澄んだ目で

### 米の調査機関視察に同行

あり、終戦後、渋沢さんが日銀總裁から幣原内閣の蔵相に就任されたのに伴い、大蔵省の終戦連絡部長を福田赴美氏から受け継がれた。その後、吉田内閣の時に新設された外務省管理委員長会の委員長に就かれた。

歴代首相の経済指圖者と言われたが、吉田茂、池田勇人の経済政策を強く批判したこともあり、外務委員会の解散と共に野に下った。豊かな実体験を基に、

経済の動きを澄んだ目で見つめて評論する木内さんの姿に、私は大学では味わえないさわやかな気分と、強い迫力を感じた。

重視する姿勢は、権威中心の日本本行き方と比べて新鮮だった。木内さんに驚かされたのは、氏の二男の孝君（現米國三菱電機会長）の仲人をしてほしい、と言われた時だ。私はまだ三十歳前で、孝君はわずか六つ若い

「八城君、どう思つかね」と感想を聞かれる。接しておられた。また大学院生に過ぎない私に、新聞用に書いた評論を見せ、「八城君、どう思つかね」と感想を聞かれる。

ついで、この言葉に誘われて「こはこの方がいいのでは」と言らると、納得されれば、すぐに採用されていた。

五六年に海外の経済調査機関を見て回ることになり、私を連れて行って下さった。ハワイを振り出しに西海岸、東部の主要大学・研究機関を訪問し、米國式研究調査の実情ヒアリングを主にした一カ月余りの旅だった。米國調査機関の実証研究を

し、九三年十二月五日に九十四



左から木内夫妻、筆者、妻陽子（56年、羽田空港）

歳で生涯を閉じられるまで、いつも勉強しているか、ご自分の思いを人に語りかけている方だった。

常々、「肉体の消滅によってすべてが無くなるのではなく、その時点から本当の意味での対話が始まるのだ」と話されていた。この回を木内さんの思い出に当てたのも、私と木内さんとの本当の対話が始まったからかも知れない。

現在、世界経済調査会は服部禮次郎氏（服部セイコ1会長）が理事長で、講演会を開催したり「世界経済週報」を隔週で発行したりしている。木内さんが理事長になられたころ、調査会の若いスタッフの一人だった高橋潤二郎君（慶応大学常任理事）を中心に、現実の世界との接点を持ちながらアカデミズムを追求しようとする学者が、木内さんの遺産を引き継ぎながら新たな発展を模索しつつある。

木内さんは八十歳を過ぎても古いトヨタのコロナを自ら運転する。

(シテイバンク在日代表)